

# 仙林寺だより

NO. 68  
編集・発行  
松田正貴

## 行事報告

### 仙林寺のお彼岸

『暑さ寒さも彼岸まで』などと言いますが、寒さは彼岸から？と、異常気象は諺まで変えてしまうかのようです。すこしやすさを喜ぶよりも何となく不安感をもよおすような超がつく暖冬が過ぎ、暦では春、ところが気候は冬に逆戻り、彼岸の入り十八日には雪までばらつくありさまで。さて、変わり者の春に乗じて？こちらの「お彼岸も趣向を変えました。恒例の「小さな美術展」は、いつもの版画や絵から紙人形に、そして新たにちよつとした茶所を新設、お彼岸時期を狙って始めたような山門前の道路工事は、こちらの趣向の一つではありません。あえて申せば行政側の趣向？でしょうか。あしからずご了承下さいませ。ただ物事はすべて考えよう、いつもならお寺で依頼する車の誘導係も、今回は公費で賄えたようで・・・冗談はともかく、ご参拝の皆様には多々ご迷惑をおかけしましたこと紙面にしてお詫び申し上げます。

### 小さな美術展〜紙人形展〜



また新たなご縁を頂きました。寺子屋協力員宮内氏の紹介で訪れた八島紙人形工房、人稱を付けて呼びたくなるくらい表情豊かな人形に感動いたしました。是非お彼岸の展覧会にお貸し

頂きたいとの申し出に快く応じて頂いた八島利幸氏、ご本人は和紙の染色加工、奥様の恭子さんが人形制作とまさに二人三脚の妙が生み出した作品です。人形の出来もさることながら、ケーキ入刀以来、子育てを経て、その後、模索の域を出ない共同作業のお手本まで学ばせて頂けるかのようです。ご夫婦あるいは家族の和合が穏やかな心へと導き、作品へと投影されるものでしょう。感想ノートにあった「心が洗われるような空間です。」まさにこの一言に尽きるようです。

### きまぐれ茶処オープン



当山お抱えの火守りさんが、三度目の火入れに参りました。観音堂囲炉裏企画第三弾、気まぐれ茶処オープンです。大晦日、寺子屋田楽、と続き今回は「彼岸の世界を垣間見る茶処」がコンセプト。この世からあの世までを一幅の絵で表現する「人の世曼荼羅」を展開するも弁士がDVDではちょっと迫力に欠けたでしょうか。次回開催時は、一人二役の火守り弁士さんが登場となるかもしれません。乞うご期待。

### 善意のご報告

中村町の須賀五郎氏から有難いご寄進です。以前、十三仏様の大きな碑を位牌堂へ



お祀りされた須賀さんですが、この度は、ガンダーラ仏然とした仏頭を彫刻されました。お彼岸過ぎには本堂から、納骨堂へのご遷座

いただく予定です。ご参拝の折は、位牌堂入り口の十三仏様、納骨堂のお釈迦様、併せてお参りいただければと思います。

### 永平寺別院長谷寺「別院だより」より

裕好さんのご修行も、半年を過ぎました。僧堂での基本所作を学ぶ「衆寮」でのおつとめを終え、現在はお寺の顔ともいいうべき「受処」に転役(てんやく)されているようです。



永平寺別院長谷寺は、僧堂とはいえ檀家さんを多く抱えるお寺の一面もありますので、ご法事やお葬式もご修行の他の公務としておつとめしなければなりません。その対外的なお相手をするのが受処という場所です。時には悩み事の相談といった電話も入る事でしょう。人生経験豊かな裕好さんですから、本領発揮といったところでしょうか。さて、その別院より「別院だより」が届きました。撰心(集中坐禅修行)での浄人(お給仕の役)をおつとめの様子、また、報恩講式(両禅師様のご恩に感謝する法要)での記念写真に元氣そうな様子が見られましたのでここにお知らせ致します。

### ひとつ「川の流れるように」

「彼岸に因み」坐禅会でのお話から

お彼岸の本来の意味は、お中日を挟んだ前後三日間を彼岸(お悟りの岸)へ渡る修行期間とするものです。さて、三日目は忍辱修行の日にあたります。「忍辱(にんにく)(耐え忍ぶこと)」は、六波羅蜜(ろくはら

みつ」と呼ばれる修行の実践項目の一つで、忍耐とほぼ同じ意味と考えて良さそうです。忍耐と聞くとは何となく息苦しさを感ずしてしまいがち、松原泰道老師の言葉を借りて、「待つことができる心」と訳されればどうでしょうか。閑話休題・中国の故事に『龍門』があります。今で言う『登竜門』の元になった言葉ですが、流れの急な龍門という川を渡り切った鯉は、遂には龍と化すという伝説になぞらえたもので、成功へ到るための関門を意味します。ひな祭りのお節句が過ぎると室礼（しつらい）は男子の節句へと衣替え致します。男の子が逞しい男子に成長することを願って家中には武者人形を飾り、外には鯉幟を立てます。鯉は「鯉の滝登り」と言われるように昔から出世魚とされており、逆流という困難に耐え川を遡る様子に例え、将来への期待や逆境に耐える強い心を願ったものでしょう。ただ、美空ひばりさんの歌では有りませんが、私たちの人生を川の流るに例えれば、雨降り後の川の急流に挑む姿は、さしずめ病氣や人との別れなどの逆境に流されまいとする必死な姿と映ります。画家の星野富弘さんの著書『風の旅』の中にこの様



にありませぬ。怪我をしてまったく動けず、将来のことを思い悩んでいたとき、ふと激流に流されながら元いた岸に泳ぎ着こうともがいている自分の姿を見たよ

うな気がした。そして思った。何もあそこに戻らなくてもいいんじゃないか、任せる

しかないんじゃないか、そう考えたとき岸に打ち上げられて助かった自分がそこにいた。『流れに棹差せば流される』の例えもありませぬ。流れに逆らって元に戻るうともかくのは過去に戻るうとすることが徒勞に終わる事と同じでしょう。歌の歌詞にこの様にあります。

ああ 川の流れのように おだやかにこの身を まかせていたい

ああ 川の流れのように いつまでも青いせせらぎを 聞きながら

苦しい日は、苦しみの意味を考えつつ、楽しい日は楽しみのみを来し方を思う。いざれ避けられないのであれば、流れに逆らわず、楽しみさえも願わず追いかけない。晴れば晴れたように、降れば降ったように。今日が好日。

### ひとつと「メタボリック症候群」

中道に因み

仏教には、西方浄土とあって、西に極楽があるという考えがあります。春分の日には太陽が真東から出て、真西に没します。この真西の日没のところこそ、往生の願いをかなえてくれるところであるという考えで、春秋二季のこの時期に、彼岸会が営まれるようになったという説があります。また、昼と夜の長さが等しい日ということ、苦しいことも快樂も、良きにつけ悪しきにつけ、極端に偏ることなき中道として、特に好ましい日とされていくようです。中道、中庸、中立等等、仲を取り持つ言葉として美しい響きも感じられるわけですが、最近、巷での話題は中性脂肪、メタボリック症候群でしょうか？。導入の手法にやや強引が見られますがそこはお釈迦様に免じてご勘弁頂きたい。という

のも実は二千五百年前、すでに中道と健康の関係を説き示しておられるのがその人「仏陀」なのです。当時、仏陀の元には大勢の王たちが悩みを抱えて訪れたと言います。その中にコーサラ国の王パセナーデイがおりました。ある日訪ねてきた王の様子を見るとふうふう大息をついています。よくよく聞いてみると王には大食する癖があり、今日もまた大いに美食を貪り食った後ですぐに仏陀を来訪したとの事でした。大息をついている王の姿をしばし微笑をたたえて眺めていた仏陀は、やがて王のために言葉を与えられます。「ひとは自ら懸念して、量を知って食をとるべし。さすれば、苦しみも少なく、老ゆることおそく、寿を保つならん。」それからの王は、側近にこの言葉を暗記させ食事のたびに側で唱えさせたと言います。その結果食事の量は次第に減り、肥満した体も減量され健康になるとともに端正な容貌になったとあります。また、この時王がお釈迦様に述べた感謝の言葉が古い經典にあります。

「まことに、世尊（お釈迦様）は二つの利益をもつて私に恵みたまはれた。私は世尊によつて現世の利益と、未来の利益とを得る事ができた。」

禁欲主義にも傾かず、快樂主義にも傾かない姿勢を実際の生活と結びつけながら中道の教えとして示した説教でしょう。食生活が豊かすぎる現代、王様になった四十歳以上の日本人は四人に一人だそうです。これまでのお話に若干耳の痛い皆様、また唱える側近に恵まれない方、「量を知って食をとる。」もはや自覚の側近に暗記させるしか術はないようです。「俺も私もメタボ」の合唱に安心してはいませんか？。